

神様の戯れ

※体験版※

『一切の汚れなく、美しいものよ。どれ、感覚はどうじゃ？』

「っ……っ」

一人が薄桃色をした鬼灯自身へ手を伸ばし、ゆるゆると弄ぶ。一瞬過剰な痺れが走ったが、触られるたびにヒリヒリした感覚が鬼灯を襲う。晒された自身は傷口のように敏感すぎて、まだ快感を受け入れられるほどに成熟していない。

『この姿、このまま汚すには惜しい。このまま灌頂烙印の儀を行おうぞ』

一人が提案すると、周囲から賛同の意を込めた声が巻き上る。

『では、まず小手調べにここへ調印じゃ』

すると集団の中から一人の人物が身を乗り出し、長い棒を差し出してくる。金の彫り物であしらわれた雅な棒の先端には、子供の手のひらほどの大きさをした四角の判が取り付けられている。判の文様は複雑で何を意味しているかわからないが、おそらく所持している者特有の紋章だろう。しかし一瞬鬼灯の心を怯ませたのは、その判が赤く、いかにも高熱を孕んでいるからだった。

鬼神の力を手に入れられる・・・それを考えれば、身を焼く一瞬の痛みなど耐え抜けば良い。どうせ痛みが過剰ならば、意識は失われる。

『やはり豪胆な鬼じゃ。これをみても眉一つ動かさぬとは・・・しかし、これはお主が考えている代物ではないぞ？』

そう言うと、その人物は一気に燃え上がる判を鬼灯の裸の胸に押し付けた。

「っ・・・」

熱い。しかし、苦痛ではない。押し当てられた瞬間、確かに肉の焼ける音がしたというのに、痛みどころか、押し当てられている箇所を中心にため息が出そうな甘い痺れが、身体全体を襲う。

その感覚は押し当てられている場所を中心にジワリと体内に染み込み、体細胞が書き換えられてゆくようなザワザワした感触も混じっていた。

ゾクゾクとした未知の感覚が背筋を伝い、鬼灯の表情を歪ませる。

「うっ・・・」

焼きごてが離されると、鬼灯を戸惑わせていた感覚は霧散する
胸には赤く謎の紋章が浮かび上がり、鬼灯の身体へ染み込むように消えていった。

『これで初の烙印は成された』

『次はわしが押しやろう』

そう言って新たな文様が刻まれた焼きごてが差し出され、鬼灯の瑞々しい太腿に押し当てる。
またもや肉の焼ける音がしたが、苦痛はなく染み渡るような愉悦がひろがるだけだった。

「ん・・・んん・・・」

思わず甘いため息を吐いてしまう鬼灯を、周囲の視線がじっと見つめる。

焼きごてが押し当てられている間、甘美な感覚は継続する。刺激は太腿を伝い、足のつま先へと走って
鬼灯の最も敏感な自身にも影響を及ぼし始める。

もう少しで大勢の目の前で恥を晒すところを、ようやく焼きごてが離され、鬼灯の白い肌に新たに烙印
が刻まれる。

『気分はどうじゃ？』

問いかけてられても、鬼灯は答ええない。まだ性の快感を深く知らない鬼灯には、体に走る甘い痺れの正体が判然としないからだ。

鬼灯の返事を待たず、次々と体中のあちこちへ烙印が押され、鬼灯の肌を甘く灼いてゆく。

胸や首筋、内腿や脇腹、足裏や手のひら……

身体をひっくり返されて、スラリと美しい伸びやかな背中へも無残に焼きごてが当てられる。

「ふうっ……ふう……」

万篇なく焼きごてが当てられ、次々に与えられる愉悦に鬼灯の体がそれらしく反応してゆく。

焼きごての熱は性の昂ぶりにそっくりで、鬼灯の身体を高め、吐息を乱し、胸の早鐘が激しく打ち鳴らされる。

なれない感覚に耐え方がわからない鬼灯は、焼きごての感覚に流されているということだけは知られないよう平静を努めた。

滑らかな形状を描く臀部にも烙印は押され、鬼灯の体をどんどん熱くさせてゆく。臀部や内腿に烙印を押されると、両足の中心に熱が集中して何故か欲情が高まり、自身が反応しだすのを止められない。

「んっ……う……」

再び仰向けに寝かされた鬼灯は、両足を大きく広げられ、秘所を白日の元にさらす格好をとらされる。幾分かの羞恥はあったが、これは儀式の一環だと自分に言い聞かせ、平静を装う。

しかし、度重なる烙印の悦楽に若い鬼灯自身は僅かに反応を示し、それだけは隠し通すことができなかった。

『やはり若い体には少々酷かもしれないなあ』

『クク、何を今さら……これからの悦は、今までとは比べ物にならぬほどだと覚悟せいよ？』

下卑た雰囲気周囲に蔓延し、鬼灯を嫌悪させる。こんな儀式で、本当に自分はただの鬼から鬼神になることができるのだろうか。ただ騙され、彼らの遊び道具にされているだけなのだろうか。すでにまな板の鯉状態になっている鬼灯には、今更拒むこともできないのだが。

新たな焼きごてが現れ、今度は鬼灯の両足の中心へと狙いを定めている。

その様子に鬼灯は生理的にたじろぎ、思わず身をすくめてしまう。それを見て周囲の人物の一人が笑い、大丈夫だと鬼灯を諭す。

焼きごてが鬼灯自身に当てられ、やはり肉の焦げる音が響き、身体の芯まで染み渡るような熱が下半身を襲う。同時に、高温と共にジワジワと愉悦がこみ上げ、射精に至りそうな愉悦が鬼灯を襲った。身体の一箇所を烙印されただけで快感の愉悦が走るのだ。それを性感帯の最も敏感な場所へ押し当てられているのだから、堪らない甘みな高まりが快感神経を刺激する。

「ううっ・・・あ・・・っ・・・」

耐え切れず身体を引き締め、与えられる快感に耐える鬼灯。自身に当てられた焼きごては、その作用を熟知しているのか、なかなか引く気配がなく、長く鬼灯を快感の煩悶へと浸らせていた。

ようやく焼きごてが離れたとき、鬼灯自身は絶頂寸前の状態で緊張し、先端から淫靡な蜜を垂らし始めていた。

『むき身にされて敏感になった場所に、烙印は酷だったかな？しかし、まだまだこれからだぞ』

周囲から声が響いたかと思うと、一斉に何本もの焼きごてが、鬼灯の体に向かって突き出される、烙印の文様はそれぞれ異なるが、どれも身を焼く激しい熱を孕み、赤く光を帯びていた。

『なに、恐ることはない。我らは同じ場所に同じ烙印を押すことはできぬ。他の者が同じ場所へ捺印することはできるがな・・・』

すると笑いを含んだ声で、その者は続けた。

『ただ、二度目からの烙印の感覚は尋常ではないぞ？悦は倍に広がり、場所によっては二乗に上乘せされる部分もある』

すると最初に烙印された胸に、別の新たな焼きごてが押しつけられる。

「・・・！」

今度の感覚は最初よりもずっと熱く、神経を、明らかに快感で染め上げてゆく意図をもった感覚だった。烙印の下に押されている胸の突起が敏感になり、ジンジンと甘い愉悦が上半身を襲う。

焼きごては鬼灯をいたぶるように長く押し当てられ、ようやく離された時には鬼灯の桜色をした胸の突起は完全に硬く反応しきっていた。

「……っ、あ……っ……」

それを皮切りに、鬼灯のあらゆる部分に焼きごてが押しつけられる。

そのどれもが熱く甘美な感覚で、鬼灯の身体を芯まで官能で染め上げてゆく。

ジュウジュウと肉の焼ける音がするたびに、快感の烙印が刻まれてゆく。やはり性に対して疎い鬼灯の若い体が耐えられるはずもなく、体は敏感にヒクヒクと反応し、再び自身へ焼きごてを当てられたときは正に二乗の快感を感じさせられた。

「うあああっ！ああっ！はあ、あああ！」

今度の焼きごても鬼灯を味わうようにじっくり長く押し続け、その間射精に近い快感が鬼灯へ継続的に与えられ続ける。

こらえ方も分ならず、ただ与えられる過剰な快感に鬼灯は体中を痙攣させ、続けられる愉悦に口端から涎が止まらなかった。

※中略※

それから一体、幾度胸だけで絶頂を極めさせられただろうか。

男の体がようやく離れたとき、鬼灯の体はすでに激しい性交を何度も繰り返したあのような蹂躪感が漂い、辺りには淫靡な雰囲気撒き散らされている。

鬼灯の体は汗に濡れ光り、黒髪は寝台の上で乱雑に乱れ、黒い着物は帯と手首だけにとどまり、ほぼ上半身を晒した格好にされている。

着物の裾も大きく割られて膝を立てた白い足がヒクヒクと震え、触られてもいないのに幾度か吐精してしまっただのか、両足の奥にジツトリと濡れた雰囲気漂っている。

まだ一度も交わっていないのに、鬼灯の体は一晚中抱かれ続けたような気だるさと、蹂躪されきった被虐感で埋め尽くされていた。

ようやく激悦の波から解放され、緩やかに息をつき始める鬼灯を見て、美丈夫の男は鬼灯の両足首を掴み、左右に大きく広げ始めた。

「……っ！何を……っ！」

着物の裾がどんどん割れてゆき、白い太腿を晒し、とうとう奥まった中心まで寝台の明かりの元で頭
されてしまう。

反射的に両足を閉じようとするが、膝頭を掴まれてたちまち足から力が抜けてゆく。

「見ないで下さい、そんなところ……」

男の視線が、奥まった自分の中心に注がれているのが痛いほどわかる。しかし制止の言葉など気かず、
鬼灯の足をさらに開かせて顔を両足の間へと近づける。

「股布が濡れそぼっておるではないか。中の色まで透けて見えるぞ……」

耳を覆いたくなるほどの恥ずかしい指摘をされ、鬼灯は足を閉じようとするが、膝にかかった男の手が
それを許さない。

男の気配が近づくが、触りに来る様子はない。相手の吐息が微弱ながら鬼灯の中心を刺激し、どんどん
切なさがこみ上げてくる。

「うっ・・・くっ・・・」

触れられてもいけないのに、鬼灯の腰が微妙に震えてしまう。羞恥極まりない部分を見つめられ、さらにわざと吐息をかけられ、一瞬腰が目に見えて大きく跳ね上がった。

「この状態で焦らすのは少し心苦しい。触ってやろう」

そう言って男は禪の上から鬼灯自身へと舌を這わせ始めた。

「はうううっ・・・！」

舌の熱い感覚と、自身の体液を吸い込んだ布が擦れ、単に口淫をされているよりも感じてしまう。薄布一枚を隔てた愛撫は焦れたく、ますます鬼灯の興奮を高めてゆく。男は下から上へ布越しに何度も舌を這わせたかと思うと、股布ごと鬼灯自身を啜えこんで唇を使って上下左右に揉みしだき、時折布を強く引っ張り、淫靡に食い込ませて快感に跳ね上がる鬼灯の反応を楽しんだ。

「ああっ、あ、ああっ・・・はあ・・・」

男の唾液と自分の体液を布が吸い、ヌルつきが激しくなつて滑りがよくなり、いつの間にか鬼灯を追い詰める性具と化してゆく。

「ううつ・・・うつ・・・！」

男に触られるたび、ゾクゾクと意識が薄れそうな快感が走る。

鬼灯は自身を嬲られるのも嫌いだつた。なぜなら、感じすぎて快感で自我が保てず、自分でも思いもよらぬ狂態を晒してしまうからである。

敏感な体にされた鬼灯には、一番とも言える雄の快楽器官を弄られて身悶えるなど当然の事だが、ただ、相手のいいように翻弄される体が悔しかった。

男は布をさらに強く食い込ませ、鬼灯自身を包み込んだまま間に挟んで上下の布を掴み、そのまま激しく前後に擦りつけ始めた。

「あつ・・・ああ・・・あつ！や、止めてください・・・！」

あまりに厭らしい責めに身悶えながら鬼灯は制止の言葉を吐くが、ヌルヌルに濡れそぼった布の擦れる感触がたまらなく快感で、どんどん激しくなる動きに鬼灯はなすべもなく性感を高められていった。

「あああつ！ああ、も、もうっ……！」

絶頂が近いらしく、鬼灯の吐息が激しくなり、先走りの液がさらに布の動きを潤滑にしてゆく。快感で両足を緊張させ、乱された黒い着物の上半身をくねらせ、完全に快楽に流された淫靡な表情をしている鬼灯は美しい。

はあはあと息を乱し、時折耐え兼ねたように艶声を上げるのが面白くて、相手はさらに責める手を激しくしてゆく。

「んんっ！あつ！ああ、あつ！ああああ！」

布をさらに食い込ませ、もっと素早く上下に擦りつけてやる。鬼灯自身の放った先走りの液ですっかり布は濡れそぼり、卑猥な水音をクチクチとさせているほどだった。

「どうだ、悦いか？悦いようだな……」

「はあ、はあ、はあ、はああああつ……！出つ……る……！」

鬼灯の体が硬く緊張したかと思うと、みるみる股布から白い液体がこぼれてゆく。絶頂中も、男は布で責め続けて鬼灯を最後まで強い快感に導いた。

ようやく男の手が禪から離され、快感から開放される。今の鬼灯には、股が濡れそぼっている不快感と、未だに収めきれない激しい呼吸を感じるしかできなかった。

「良い顔だ……。日頃のお前からは想像もできん、遊女も逃げ出す淫らな顔よ……。さすが、余を魅了しただけのことはある……」

そう言って無骨な手を鬼灯の頬にピタピタと当て、吐息で半開きになった小さな口へ乱暴に指を突き入れる。

「んっ！ぐっ……！」

鬼灯の舌が仄かに発光し、いくつもの複雑な文様が消えては浮かび、舌から全身へ快樂が走っているかのように身体もヒクヒクと痙攣する。

男は再び鬼灯自身を、濡れそぼった布ごしに掴み、そのまま揉みしだいて愛撫を加えてゆく。

「うっ・・・くっ・・・」

布越しでも、男の大きな手のひらの熱が伝わり、逞しい手のひらに弄ばれている屈辱がこみ上げてくる。しかし、それを上回る快感のせいで鬼灯は呻くしかできないでいる。

鬼灯の体液を吸いきれなくなった布から雫が滴り、男の手を濡らしてゆく。いつもはあっという間に自分の体からすべての布を剥ぎ取り、自らの欲のまま体内へと突き入れてくるというのに、今夜はいつもと責め方がちがう。

「はぁ、はぁ、も・・・とつとと終わらせたらっ・・・どうですかっ・・・」

濡れた布が淫らな水音を立てるほど激しく弄ばれ、快感に悶えながら鬼灯はなんとか言葉を発する。すると男は鼻で笑い、手の中の器官を握りこんで、さらに強い刺激を与えながらいう。

「たまにはこういうもの良からう。大体、お前は敏感すぎて余に触れられただけで極めてしまうから面白くない」

「んんっ！・・・なら、私の夜伽など・・・必要ないでしょう・・・っどうぞ、他の方を相手になさってください・・・」

恨めしそうに睨みつけてくるが、その瞳は下半身に走る快感に邪魔されて、覇気がない。鬼灯の言葉を聞き、男は苦笑いし

「そうなんだが、そう思って他の者を抱いていると、急にお前を思い出すのだ」

「本当に、勝手・・・ですね・・・」

鬼灯が憎まれ口を叩いている間、男は股布を右へずらし、鬼灯自身を外界へ露わにする。先程射精したばかりなのに、鬼灯自身はすでに反応を始め、布から解き放たれた開放感で、遠慮なく鬼灯の両足の間に存在を示した。

「今宵は久々にうんと可愛がってやろう。なに、我が花嫁を壊すつもりはない故、安心するがよい」

花嫁・・・

そういう呼称に沿うほど甘い睦みは皆無だが、契約上、自分はこの男とそういう役割ということになる。しかし、花嫁と言うよりも……

(ただの情夫だ、これは……!)

ふてぶてしく「花嫁」などと綺麗事を吐く男に腹が立ち、頭の一つでも叩いてやろうかと手を擡げた途端、男は鬼灯自身を直接手のひらに握りこんだ。

「っ! あっ……! ああああっ!」

突如鬼灯の顔に絶頂に似た表情が浮かび、声も激しい快楽を受け入れている彩に切り替わった。

男がゆるゆると自身を撫で擦ると、堪らないとばかりに鬼灯は両足を激しくばたつかせ、すぐに両足をつま先まで緊張させると、自身の先端から白液をトロトロと吐き出した。

しかし、射精したというのに鬼灯の絶頂は終わらない。

この男に触られているだけで、絶頂してしまう浅ましい身体だ。

弄ばれている鬼灯自身も淡く発光し、文様を描いては消えてゆく。

鬼灯を快樂で雁字搦めにする呪法……。

「朝まで時間はある。愛してやるから、おとなしく舌を出すのだ」

男の美麗な顔が迫り、口づけをしようと顔を近づける。鬼灯はおとなしく舌を出すつもりなどなかったが、いざ口づけされてしまうと、もう逆らえなかった。

口から流し込まれる快感と下半身で絶頂し続ける激悦に鬼灯の体は歓喜し、無意識に相手の身体を受け入れ始めた。

※中略※

明かりを落とされた部屋の中、寝台の上で、異形の物体にとりつかれ、嬲られている者がいる。異形の動きに合わせて熱っぽい呼吸が部屋に響き、艶声をポツポツと落としている。

「あつあつ、んあ、ああつ！あああつ・・・イクつ・・・！」

異形に絡められた白い体が引き攣り、震え、弛緩する。絶頂に至ったらしい白い裸体は達精に息を乱し、汗を滴らせているが、異形の動きがとまる気配はない。

「うああつ！も、もうっ・・・！あああつ！」

激しい動きに、絶頂で疲労した体が無理矢理反応させられる。白い体が仰け反り、官能の汗が飛び散るが、体にまとわりついた触手がその汗さえも舐め取ってゆく。

「はぐっ・・・ん、んんっ、うああつ！」

鬼灯は寝台の上に正座で座らされ、太腿と脛に触手が巻きついて足を折って拘束されている。そのまま両足を左右に大きく開かされ、寝台と鬼灯の体の間にできた空間に、びっちり丸太のような触手が滑り込まされている。

ぬめる表面に、弾力のあるイボをびっしりと生えさせた触手の側面が、鬼灯の両足の間でズルズルと前後に動いている。

「んあつ、あつ、あつ、あああ！」

最も敏感な性感帯が集まっている股ぐらをぬるイボの触手で摩擦され、鬼灯の体がドロリとした快楽に支配される。

大きさや形、弾力の違うイボが生え揃った触手が激しく動き、鬼灯自身、会陰、後ろの入口を激しく刺激し、ヌルつく粘液で動きと快感がさらに増長される。

両手首には触手が絡みつき、下方に引っ張られて完全に拘束されている、

「はっ、はあ、ああっ！あつ、ああああっ！」

淫靡な丸太触手の上に跨らされて、鬼灯の体が激しく揺さぶられる。これだけでも腰がトロけそうな快楽だというのに、無数の触手が鬼灯の体にとりつき、美肌の上をヌルヌルと這い周り、弾力のあるイボが生え揃った部分で胸の突起もコリコリと刺激し続ける。

「うあ、ああっ！ああっ！」

胸の快感をこらえようと俯くと、両足の間の触手の食い込みが激しくなる。その瞬間を狙って、丸太触手はさらに激しく身を蠢かせ、体の中心の性感帯をゾリゾリと撫で擦る。

自身の裏筋をぬるイボでコリコリと刺激され、鬼灯の体が上下にビクビクと痙攣し、先端から勢いよく白濁が吐き出される。

「んううっ！うっ・・・ああっ！・・・っ！」

触手に全身愛撫をされ続けて、どれほど時間が経過しただろう。もう数えられないほど絶頂を迎えさせられ、いつまでたっても体の疼きはとまらず、ずっと心が折れそうな快感が続いている。

（ま、またイカされた・・・こんな、こんな得体の知れないものにつ・・・）

鬼灯の意思とは関係なく絶頂させられ、屈辱感がせり上がってくる。しかし、触手の動きがそれを上回る快感を鬼灯に与え、反抗心を一気に押し流してゆく。

触手から湧き出る粘液に強力な媚薬効果があり、それが一層鬼灯を敏感に、深い絶頂へ達するようにさせているのだが、原因は他にもある。

「やはり随分と気持ちよさそうではないか。心は忘れても、体は覚えていたところか・・・」
自分をこんな目に合わせている張本人が近づき、鬼灯に口づけすると、唾液に神気を乗せて体に注ぎ込む。触手の粘液で敏感になった身体を、過剰な刺激を与える神気が通り抜け、さらに鬼灯の性感を高め
てゆく。

「んんっ・・・ふっ、ううっ・・・！」

流れ込む神気の刺激で背中を震わせ、両足の間にも与えられ続けている淫悦にも耐えなければならぬ。
鬼灯が苛烈な快楽に耐えていると言うのに、男はまだまだ追い詰めるかのように、鬼灯の体へ神気を流
し続け、さらに分厚い舌で口の中をまさぐり、鬼灯の舌を捉えて激しく吸い上げる。

「んふっ！んん、んっ・・・んんっ！」

（頭が、クラクラするっ・・・）

体の性感帯を愛撫されながらの激しい口づけは、鬼灯をますます敏感に、頭を淫蕩にトロかせてゆく。ブルブルと震える鬼灯の腰に触手が巻き付き、その刺激でさらに体が激しく震える。連続して絶頂しているかのように身体を跳ね上がらせる鬼灯を見て、男は鼻で笑うと、触手に舐られ続けている胸の突起を指で強く抓んだ。

「んんっ！あつ、あああああ！」

快感を限界まで詰め込まれてはちきれそうになっている体に、男は容赦なく刺激を与え続ける。高揚して硬くなっている突起を指ですり潰すように捏ねまわし、強くつまんでは引っ張り、爪で弾く。

「あああああつ！やめ、やめ、あつ、あああつ！」

耐えきれない快感に鬼灯の頬を涙が伝い、自由に動かせる首を激しく振り、男にいじられるがまま、身体を快感で跳ね上がらせる。

（灼けてる、もう、感じすぎて、感覚がっ・・・！）

男に刺激されるたびに胸で絶頂を迎え、連続して与えられる激悦に、鬼灯の性感神経が暴走する。上半身の悦だけでギリギリだというのに、絶えず触手に下半身も廻られ続け、体中に快感が電気のように伝わって鬼灯を激しく身悶えさせる。

「淫気をおびた触手より、やはり余の指の方が感じるか・・・愛いやつよ」

はあはあと息を乱し、快感で顔を紅く染めている鬼灯に軽く口付けし、男は鬼灯の股ぐらを擦り続けている丸太触手に手を当てた。

「褒美に、鬼どもでは与えられなかった悦を与えてやろう。存分に楽しめ、鬼灯。」

男が触手を強く握ると、鬼灯の肌と接触している触手のイボが一斉に激しく振動し始めた。

「あああああっ！？っ、はうっ、あああああああ！」

触手の振動が自身の裏筋を激しく刺激し、さらに強烈な擦り込みを与えてくる。

あまりに鮮烈な快楽の刺激に、鬼灯の頭がついていく間もなく、体が先に反応し、いとも簡単に絶頂へ引き上げられてしまう。

「ああああっ！ああっ、イク、イク、ああああっ！」

鬼灯の叫びと同時に、再び自身の先端から白濁が勢いよく噴き出される。絶頂している間も激しい振動で性感帯を刺激され、絶頂している間に、また絶頂の波が押し寄せてくる。もう一つの絶頂に至る器官である会陰も存分に刺激され、危険な絶頂を迎えようとしている。

(な、なんだコレっ・・・！まさか、こんな場所です・・・！)

五日間の陵辱で、そこを獄卒たちに開発されてしまったことを知らない鬼灯は、自分の身に迫り来る会陰絶頂の高鳴りに不安と恐怖を募らせる。

ずっと刺激され続け、かなり強い快感を感じながらも、まさかこの部分で絶頂するとは思っても見なかった鬼灯は強く焦り、なんとか触手の刺激から逃れようと腰を浮かそうとするが、さらに触手に巻き付かれて強く食い込まされ、余計に強力な刺激を感じさせられる結果になってしまう。振動の逃げ道がなくなり、全ての動きが鬼灯自身に流れ込み、さらなる快感を鬼灯へと強烈に叩きつける。

「ああっ、あ、んうう、こんな、はあ、あっあっああっ！」

鬼灯が額の汗を飛び散らせながら、頭を激しく振って狂乱する。ゾクゾクと快感の塊が体に押し寄せ、受け止めたくないのに、体はどんどん快樂の高みへ登ろうとしてしまう。

「んんんっ！はあ、ああっ！だめ、だめ、ああああああ！」

鬼灯の体が激しく痙攣し、自身の先端からもトロトロと精液がこぼれ落ちる。拒んでいた強烈な快感が一気に下半身へ押し寄せ、鬼灯の体で暴れまわる。電気に打たれたように体はビクビクと痙攣し、あまりの快感で鬼灯の口端から淫らな涎が垂れている。

「あっ、あっ、あっ、ああ、あっ……っ！ああっ！」

腰から頭までをビリビリと痺れさせ激しい絶頂を迎えてしまう。

（なんだこれっ！？こんな、こんなイキ方などっ……！）

快感を覚えている体は刺激に逆らわず、弄ばれるまま絶頂した。しかし、自分の体が会陰部などでイけるなど知らない鬼灯には、ほぼ初めての快感であり、感覚だ。

射精とも肛悦とも違う激しい性の快樂に戸惑い、我慢の仕方も受け流し方もわからない。

「ふあっ、あっああああ！ま、また・・・イクっ・・・！」

先ほど絶頂を迎え、ようやくその高みから降りようとした矢先に、また絶頂へと登っていった。絶えず触手の激しい振動に晒されているそこは、肛悦のように一度絶頂すると刺激され続ける限り絶頂を繰り返すようだ。

同じ前立腺での絶頂なので後ろで達するのとリズムは同じだが、わけがわからない鬼灯には未知の快感と繰り返される絶頂に戸惑うばかりである。

「あああっ！あっ、あっ、ああ・・・っ！」

ビクビクと白い体が痙攣し、再び絶頂の高みへ押し戻される。

「なかなかの悦を味わっているようではないか、鬼灯。だが、せっかく股の間を前後に擦られているのだ。ついでに、こちらでも可愛がってもらえ」

絶頂の感覚をこらえるのに必死になっている鬼灯を尻目に、男は丸太触手を辿り、鬼灯の美尻に擦り付けられている部分へと手を這わせてゆく。

相手が何を仕掛けてくるにしても、自分をさらに責める手管を使ってくるに違いない。身体を駆け巡る過剰な快感に意識を乱されながら、鬼灯は身構える。すると、突然相手に臀部を驚掴みにされ、双丘を左右に開かれた。

「んんっ！あっ・・・ああ、ああっ・・・っ！」

後ろの入口に、弾力を持った振動する何かを押し当てられ、鬼灯の体がすくみあがった。ゾクゾクと背中を駆け上がる快感をこらえていると男が片手を離し、振動する物体を鬼灯の後ろの入口へ押し当てる。

「ああああっ！そ、それは、だめっ・・・今はだめですっ・・・！」

男の意図をようやく察知し、鬼灯は静止を叫ぶが、それでやめる相手ではない。

両足の間を前後に擦られ、その動きに律動して振動する物体が後ろの入口へ押し当てられる。

丸太触手から新たに男性器の形をした触手を生やさせ、鬼灯の体内へ挿入し、後ろを犯させようとしているのだ。

(絶対に挿れられたりしないっ・・・！)

今でも十分狂乱状態だというのに、最も鬼灯をよがり狂わせる挿入を許してしまったら、もう正気を保てないかもしれない。

入口に先端を押し当てられ、丸太触手の律動に合わせて挿入を試みるが、鬼灯が腰を僅かにずらせて狙いを反らせる。体内に入ることが叶わなかった触手が、振動しながら悔しそうに鬼灯の双丘の間をツルリとなぞる。

「うああっ・・・！」

その感覚だけでもゾクゾクと背中に官能が這い上がり、鬼灯の心は快感で塗りつぶされてしまう。

「ふん・・・」

背後にいる男に肩を押され、前かがみに上半身を倒される。前後運動を繰り返しながら振動するぬるイボに、鬼灯自身がますます食い込んで一気に射精感が下半身を突き抜ける。

「ああああっ・・・！んんっ、イク、また、出っ・・・」

鬼灯の叫びが終わらない内に、自身の先端から甘美な絶頂の証が噴き出される。射精の最中も振動にさらされ、射精感が下半身でいつまでも渦巻いている。

「は、あ、あああああつ・・・！」

連続してもう一度射精し、鬼灯はようやく絶頂を終えることができた。しかし、一瞬油断した鬼灯に待ち構えているのは、もっと苛烈な仕打ちだった。

鬼灯が自身の絶頂に気を取られている隙に、体が弛緩したのを見計らって男が触手を鬼灯の後ろへ突き入れたのである。

「ああああああ！」

狭い入口をかき分けて洞内に挿り込む振動を伴った肉棒。その表面もぬるイボが密集していて、過敏な鬼灯の内壁を遠慮なく擦りあげ、快感神経のすみずみまでを掘り返してゆく。

「はううっ！あつ！あああああ！ああつ！あつ、あつ、つつ！」

※中略※

両手足を見えない枷で拘束され、体の動きを封じられる。自身がどんどん激しく疼いて、拘束されていなければ間違いなく自らで慰めていたであろう。

理性的な鬼灯をそこまで追い詰めるほど、自身の絶頂への欲求は高ぶっていた。口からは熱を孕んだ荒い吐息が次々と吐き出され、快感を欲して鬼灯の白い身体がビクビクと痙攣する。

(はあ、はあ、身体がっ・・・激しく疼いてっ・・・!)

誰でも良いから、自身に触れて激しく弄んで欲しい。先程まではあれほど拒絶していた快感を、今度は涙を浮かべるほどに激しく欲している。

『鬼灯、身体が疼いて仕方ないか?』

神霊に問われるまま、鬼灯は力強く何度も首を縦に振る。

『では、触ってやろう・・・』

神霊の一人が近づき、鬼灯の胸の突起を指で弾く。

「あ、ああっ！」

望んでいた快感とは違うが、突如与えられた快感に、鬼灯が全身を震わせて反応を返す。何度も指でビシビシと弾かれ、その度に鬼灯の身体が反り返り、硬直し、震え、熱い吐息をはあはあと吐き出す。

『鬼灯、さぞ気持ちよからう・・・』

神霊の指がもう一つ増え、鬼灯の両方の胸の突起を激しく愛撫にかかる。

「あ、あああっ！ふうっ・・・んああ！」

片方でも身悶えるほどだというのに、両方を同時に激しく弄ばれ、鬼灯は思わず艶声を上げた。触られている部分だけでも十分感じる、始まりがあつて終わりがある、激しい感覚が何度も廻らされている胸を駆け抜け、上半身を刺激されているのに、快感は下方まで伝線する。

「んんんっ・・・ああ・・・っ、はあ、はあ」

ジクジクと両足の中心が疼き、快感を堪える神経がビリビリと震え、堪え難い波が押し寄せてくる。次々と上半身から快感を流し込まれるが、それだけでは決して望む快感に到達できない。

その焦れつたさと疼きは初めてのもので、いつも脳細胞が焦げ付くほどの快楽を与えられていた鬼灯には未知の感覚だった。

(さ、触って欲しくないのにつ……！)

両足の中心でドクドクと脈打ち、刺激を欲してどんどん疼きが激しくなっていく。足の拘束を振り切ろうと力を込めるがびくともしない。

『鬼灯、苦しかろう。触ってやるぞ……』

その声をかけられたとき、鬼灯の心は歓喜に包まれ、すぐにそう感じてしまった自分を叱咤する。

(な、何を期待しているんだ、私はっ……)

しかし体は心を裏切り、刺激される期待感で、既に先端から透明の液をこぼし続けている。

神霊の一人が近づき、自分の意思に反して心臓を高鳴らせてしまっている鬼灯へと手をのぼし、白い太腿へと手を掛ける。

「んんっ・・・」

場所が近いだけなのに、その感触が自身へもビリビリと伝わり、思わず快感のため息が口をついて出る。足の付け根まで一気になぞられ、すでに感触は明確な快感となり、鬼灯の吐息の熱を高めてゆく。そのまま神霊の指が両足の間、奥へ進み、先ほど捺印された陰囊に触れる。

「はっ・・・あ・・・」

触れて欲しい場所はそこではないが、まともな性感帯であるそこを刺激されると、今までで一番感じてしまう。神霊に触れられ、その場所が複雑な文様を描きながらぼんやりと光る。

その途端激しい欲情に襲われ、激しく刺激してほしくなる。ビクビクと両足が引きつり、下半身へ神経を集中している最中に両胸の突起を同時に抓まれ、電気のような痺れる快感に鬼灯が声を上げた。

「あああつ！」

鬼灯の喉が震え、再び与えられた始まりがあつて終わりがある激しい快樂に上半身を跳ね上がらせる。

『こちらの愉快もたまらんだらう？』

そう言つて神霊が、淡く光る鬼灯の胸の突起を指で捏ねまわし、何度も激しい快感へ押し上げ続ける。

「あぐつ、あああつ！はああ、あつ、あつ、あつ！」

あまりに連続して与えられ続ける激感に、鬼灯の目端から涙がこぼれ落ちる。ようやく神霊が指を話した時、鬼灯の喉は引き攣れ、しゃくりあげるような吐息が短く吐き出されていた。

『手加減してやらねば、いくら悦といえど辛いぞ・・・？』

鬼灯の両足の中心にある器官へ指を突き入れ、神霊は胸を弄んでいた同士を軽い調子で諫める。しかし、己も鬼灯にしている仕打ちは同じだということがわかりきっているようで、声にはどこか笑いを含んだ響きがあった。

「んぐっ……！」

捺印されたばかりの陰囊をつつき回され、神霊の手が包み込み、ゾクゾクと愉悦が背筋と自身へ走る。そのまま手を巧みに動かし、自身と直結している器官を激しく刺激してゆく。

「あああ……っ！」

小さな声で呻き、鬼灯が愉悦に身悶えする。徐々に力を込めて握り込まれ、どんどん快感が強まってゆき、まるで小水のように鬼灯自身から白濁がこぼれ落ちた。

「……っ！」

自身に直接触れはされなかったものの、射精は射精。久しぶりの強い快感が鬼灯を襲い、息を詰まらせ、喜悦に体を震わせる。

「あつ、あつ、ああ、ああっ！」

陰囊の刺激で達した鬼灯をおもしろがり、神霊はそのまま手の中の器官を弄び、ときにコリコリと響くほど激しく揉みしだく。

「ああああ・・・っ！ああっ！あっ！はうううっ！」

鬼灯自身から冗談のように精液がこぼれ落ちてゆく。自身は全く刺激されていないのに、その下の部分の刺激だけで達することができると、鬼灯には初めての経験で、快感のこらえ方も受け取り方もわからない。

しかし刺激されている部位は確実に心地よく、鬼灯は与えられる刺激のまま悦を貪り、幾度か射精を繰り返した。

『ふふ、腹が精で白く染まっておるぞ・・・ほんに我慢のきかぬ体じゃ・・・』

ようやく刺激を途切れさせ、鬼灯の体を省みてやると、自身は下腹に付きそうなほど硬く反応し、幾度も射精した精子の中に浸されている。鬼灯が身じろぐと、白液が脇腹を伝い、寝台の敷布を濡らしてゆく。

(こ、こんな方法でイカされるなんて・・・っ)

今もゾクゾクと快感を感じながら、鬼灯は羞恥の極みであり、屈辱的だった責めに唇を噛む。しかし、決して一度も触れられていない自身が、未だに刺激を欲して脈動している音が、耳のすぐ下で聞こえるほどだった。

『若い鬼の精など、そうそう吸えるものではない。今度は私が、そこに口付けて愛でてやろう』

また新たな神霊が鬼灯の両足の間にたち、刺激を欲してやまない体を傲岸と見下ろす。

(何・・・？口付け・・・？)

鬼灯が回らない頭で神霊の言葉を反芻している間に、両足がさらに広げられ、今度は膝を立てさせられる。

陰囊の刺激で射精に濡れた下半身に神霊が袖をかぶせ、剥ぎ取ると、下腹部は何事もなかったかのように精液が拭き取られていた。

『かように汚れない摩羅は始めてじゃ。さぞ、しゃぶりがいがあるだろう・・・』

先程から神霊が呟く言葉に、鬼灯は嫌な予感と信じられない思いが交差しつぱなしだった。まさか、自分でも滅多に触れない不浄の場所に、口を付けるなどと、そんな事をされるわけがない。

しかし神霊は唇を鬼灯自身へ近づけ、ふ、ふ、と息を吹きかけ、快感への期待感を強く煽る。

その息は熱く、このまま口で包まれれば、どれだけの愉悅が駆け巡るだろうか、考えただけで先走りの液がこぼれ落ちる。しかし、口淫などという信じられない行為をこれからされることの背徳感に、鬼灯は頭を激しく混乱させていた。

『では、ただこうとしよう・・・』

神霊は鬼灯の予感どおり、鬼灯自身を先端から根元まで一気に、口で覆った。

「つつ！ううっ！あっ！はあ！」

信じられない思いと同時に、予想以上に高い口内の熱と、ヌメる感覚に、鬼灯の腰が何度も小さくはねあがる。

「うううっ・・・やめっ・・・て・・・ください・・・っ・・・こんな、事っ・・・！」

とんでもない行為を神霊に施され、その予想以上の快感に打ち震えながらも、鬼灯は拒絶の意志を見せる。しかし、神霊は鬼灯の言葉など聞こえていないかのように、どんどん口内で自身を刺激してゆく。

熱くうねる口の粘膜が自身を刺激し、自在に動き回る舌が器官全体をぐるりと舐め回す。

「あぁっ・・・あっ・・・あぁ・・・！」

あまりの底ぬけた快感に、鬼灯の口から陶醉した喘ぎ声が放たれる。

散々焦らされ、高められ、ようやくされた刺激方法が、最も喜びが強い行為であった。不浄の場所を神霊の口で責められているという背徳感も忘れて、鬼灯は自身に走る激しい愉悦へ、無意識にもたれかかってしまい、されるがまま喘ぎ続けた。

「んんんっ！はぁ、あぁあっ、も、もう、出るっ、出ますっ・・・！」

口内で柔らかく揉みしだかれながら、舌が根元から先端を何度も往復する。あまりの気持ちよさに鬼灯は自身が溶けてしまったかのような錯覚すら覚えたが、確実に迫りくる絶頂感に、辛うじて自分を騙る神霊へ射精の予兆をつける。

口を離してくれると思っていたのに、神霊はそのままさらに愛撫を激しくさせ、舌の動きを早め、鬼灯自身を蹂躪し倒した。

「はあっ！あっ！あああああー！ー！」

快感のあまり、目の前が真っ白に染まってゆく。目が眩むほどの法悦はこれまで幾度知れず味わわされてきたが、これほど心から悦を貪ってしまったことはなかっただろう。

あまりの激悦感に鬼灯は腰が抜けそうなほど強い射精感を味わい、体中をガクガクと震わせた。

（こ、こんなやり方で気をやってしまうなんてっ・・・！）

相手に自分の性器を口で銜えられながら、止めることもできず射精してしまっている自分が信じられない。しかし、疼きを解消された快感と性の絶頂を極めた快感がごちやまぜになって、鬼灯の頭を今も薄ぼんやりと白く霞ませている。そして、これから起こる自体にも全く気づくことができなかった。

「あああっ・・・！あ、あああ、やめっ・・・はぐっ・・・うあああ！」

口淫を施していた神霊が、射精し終わった鬼灯自身をさらに強く吸い上げ始めたのである。器官の中に吐き出しきれず残った精液も強制的に吸い取られ、強烈な吸い上げに腰がトロけそうになり、鬼灯は再び激しく絶頂をむかえてしまう。

「あああああ！ああっ！はあっ……！！」

ゾクゾクゾクと背筋に悪寒とそっくりの快感が走り、あまりの激しさに、鬼灯の背中が拘束されたまま、限界まで弓なりにそり上がる。

両手は敷布を硬く掴み、両足は指先まで内側に硬く縮かみ、体中で法悦の極みを表現する。それでも神霊の吸い上げは終わらず、今度こそ枯れ果ててしまいうようなほど鬼灯は激しく射精の極みを恐ろしい程長い時間、味わわされた。

「うう……っ……」

とうとう快感に耐え切れなくなり、鬼灯の意識が闇に沈む。最後にもう一すすりして、神霊は鬼灯の若い精を思う存分味わった。

※中略※

そういえば、情交の最中にキセルを勝手に使われていたことを思い出す。しかし、だからなんだというのだ。キセルを交換し合ってタバコを吸い合う仲だというぐらい、どうとういう事ではないではないか。すると白澤はキセルを口に含み、一瞬目を光らせると口から離し

「ん！？この感じ、相当霊格の高い神だぞ！」

何その特技・・・と呆れながら、鬼灯はキセルを取り返そうと手を伸ばすが、白澤は返さない。

「ちよつと待った、もう少しで誰かわかるような気がする！ん？これはなんだか日本の神とも違う感じだぞ？」

鬼灯の手を避けながら、キセルの口の部分を吸いながら思案に更ける。一方鬼灯にしてみれば、自分のキセルを他人に舐り回されていることに不快感を覚え、とうとう実力行使に出た。

「ギャーーーーー！」

白澤の魂切れるような悲鳴が部屋に響き、鬼灯は頬を摘み、餅のようにながーく引っ張っている。

「いい加減に返してください。．．．気持ち悪い」

「に、二回気持ち悪いって言った．．．」

白澤からキセルをとりあげて頬を開放し、バチン！と罰ゲームの「啞えゴム」のような炸裂音がなり響く。白澤はソファに倒れこみ、丁重に扱われた頬を抑えて悶絶している。

「大体、私とその神様とどう関わるうが、あなたには関係ないはず。それに、日頃から女性にだらしないうあなたに言われるのが、全く腑に落ちません」

キセルの口をテーブルのティッシュで拭きながら、鬼灯が怒り声で言い放つ。

「でも、愛してるって言ってたじゃん．．．」

「．．．．．！」

その言葉を聞いた瞬間、鬼灯の体中の血液が沸騰し、顔がみるみる紅潮してゆく。しかし白澤に気取られる前に素早く金棒を構え、大きくフルスイングした。

「わあああああ！」

とっさに身を伏せて避けたが、直撃していれば首がもげて壁に吹っ飛んでいたかもしれない。

「どこで聞いた！そんな言葉！」

「一昨日！一昨日です！」

「ま、まさか千里眼で覗いてたんですかっ・・・！」

よりもよって、あの激しく狂乱を極めた情交の場面を白澤に見られたことに取り返しがつかない羞恥を覚え、鬼灯は金棒をソファにめり込ませながら白澤の目の前にズンと叩きつける。

「の、覗いてないよ！声だけ！声だけしか聞こえてない！」

「声！声って・・・！やっぱり覗いてたんじゃねえか！」

「違うよ！鬼灯はベッドで眠ってたし、相手の姿も声も聞こえなかったよ！ただ、鬼灯のスケベな声だけがやたら聞こえてきてたんだよ！」

「・・・・・・・・！」

寝台で眠っていた鬼灯は傀儡だろう。通常はそれ自体が空間を遮断する役割を持っているので周辺で鬼灯たちが何をしようが、相手には見えないし聞こえない。

しかし、神獣である白澤には全てを防ぐことはできず、声だけは漏れてしまったのだろう。

白澤の言葉を聞いて、鬼灯は一つ深い溜息をつく。白澤に対して静かな怒りが湧き上がってきた。

あれほど千里眼を使って自分を覗くなど言いつけたのにそれを破った無神経さと、自分が他の男に抱かれている声を聞かれた事の羞恥の両方が、鬼灯をイラつかせる。

(本当に全く！コイツは節度を知らないのか！)

手にした金棒にググっと力がこもり、自分が制裁の対象にされていると察知した白澤は、再び繰り出される攻撃に備え、ソファから立ち上がって鬼灯からソロソロと離れた。

しかし、そんな二人の緊張した沈黙を破ったのは、突如響いた店の戸を激しく叩く音であった。未だに怒気を漲らせている鬼灯をさりげなく避け、これ幸いとばかりに店の入口へと疾走する。

「はいはいはいはい！急患？だったらすぐ診るよ！扉開けるから、ちよっと待っ・・・」

白澤が言葉を終えない内に、ドーンと勢いよく扉が開かれた。

「邪魔をするぞ神獣！いやむしろ、余が直々に足を運んだ事を光栄に思うが良い！」

その言葉と同時に、薄暗かった店内が男を中心に眩い光に包まれた。

いきなり威高々に宣言する男の風貌は、白澤よりも頭一つ背丈が上で、逞しい身体に赤金の甲冑をまとい、眩い宝石を散りばめた装飾で自らを飾り、一括りに結い上げた見事な長い黒髪をたなびかせていた。

まるで歌舞伎の見栄のように派手な登場をしたその男の顔を見て、白澤は疑問が止まらなかった。

「ほ、鬼灯・・・何してんの・・・!?」

「んん？鬼灯は今しがた貴様の居間におるはずだが？」

白澤は頭を左右に激しく振り、正気を取り戻そうとする。

目の前の男の顔は鬼灯そっくりだが、角もないし前髪があつて髪が長い。顔は実際の鬼灯よりも大きい
が、パーツも大きいので迫力のある美丈夫と言ったところか。

何より身体のはつきりは、ガツチリタイプと自分が言つてはばからない鬼灯とは比べ物にならないほど遅
しく、腕など筋肉が隆々としていて、東京タワーぐらい引っこ抜けそうな力強いものだった。

そして、目の前の鬼灯とそっくりな男と対峙した瞬間、白澤はこの男が鬼灯の相手なのだと理解した。
さきほどのキセルの神気と全く同じで、なによりこれほどの圧倒的な存在感でもなければあの鬼灯を組
み敷けるはずがないと感じたからである。

「だ、誰？」

※続きは製品版でお楽しみください※